

## わたしのオーストラリア生活 11 年奮闘記/日本国領事館職員編

『Just do it !』—スポーツメーカー『ナイキ』のキャッチフレーズで、僕は『つべこべ言わず、行動に移せ!』と解釈している。

まさにグローバル人材に求められる資質でないだろうか。

渡豪のきっかけは、イタリア料理店見習いからホテルマンへの転身を考えて時の事。

当時（90年代後半）の日本は、新卒偏重かつ25歳以上の再就職が非常に難しく、そこで『海外のホテル学校を出れば、ホテルマンへの道が開けるのではないか』と考えていた。

『就職＝新卒』という日本社会のルールから脱線した僕にとって、海外挑戦はLast Resort（最後の手段）であり、だからこそ海外へ飛び出すという『行動あるのみ』だった。

前回綴ったホテル勤務は悔しい形で幕を終えている。失職の背景は人種差別に起因する労使問題。雇用が流動的なオーストラリアでは、良くも悪くも職場環境が変わりやすい。

公正だったマネジメントは様変わりし、非白人従業員が表舞台で活躍することが疎まれる状況に変化していった。

僕は労働組合の後ろ支えを受け、不公平に異を唱えていたが、心労から勤務中にホテルロビーで倒れ、救急車で運ばれた。これがホテルマン最後の日となった。

この苦い経験はトラウマとなり、以来、ホテルへの再就職を拒んでいる。

僕は個人事業主としてパースの魅力を伝えるビジネスを次のキャリアに選んだ。エコ・ウェーキングのツアーを主催し、インターネットを通じてパースやオーストラリアの自然や文化を紹介する事業だ。

大学院で専攻したEコマース（電子商取引：編集部注）では、インターネットを通じたビジネスについて勉強したが、その中で学んだホームページ作成の経験が役に立った。

当時流行していたブログやメルマガにも挑戦した。  
パース市内の公園を駆け回り、博物館や図書館で歴史背景を調べた。  
先住民アボリジニやオーストラリア建国についても独学で勉強した。

州政府の起業支援事務所にも何度となく足を運んだ。  
事業者登録や商号登録をおこない、高額な事業者用保険にも加入した。

あとはお客様を待つだけとなった2006年7月、在パース日本国総領事館から連絡が入った。

以前、領事業務職員（各種証明書等の発行を担当する、一般にイメージされる役所の窓口業務）に応募した事があったが、広報文化担当職員として採用したいとの事だった。想定外のキャリア転換となった。

勤務して間もなく、世間が僕を日本政府の一員として見ていることを実感させられた。

企業幹部と思われる方々から恭しく挨拶され、持ち上げられることもあれば、勝手な想像に任せて『あいつはイイ身分だよなあ』と揶揄する声が聞こえてくることも…。

ホテルマンの僕も、（失業者と揶揄されていたが）個人事業主として準備していた僕も、『みなし外交官』の僕も、同じ『僕』だが、他人はそう見ていなかった。

『上辺で相手を判断してはいけない』と僕は身を持って学んだ。自戒を込めて言えば、日本に限らずオーストラリアでも、世間の行政に対する風当たりは強いのだが、そこには誤解も多いように思う。

僕の担当はPublic Diplomacy（草の根外交）で、文化・教育・交流等の事業を通じ、オーストラリアの人々に日本をより良く理解してもらう事を目的とした活動だ。



具体例を挙げればきりが無いのだが、画像（新聞の切り抜き）はその一部で、『いけばな教室（ほか、実演会や展示会）』と『陶磁器展』に係る新聞記事。

前者は戦争花嫁として渡豪し、半世紀以上も在住するチェスター先生が指導・監修している。

カリスマ的ながらもチャーミングな先生だ。

後者はサウス・パース市と総領事館とで共催した展示会。

仕事柄、親日家を始め、大学や自治体等とのネットワークは欠かせなかった。

ホストとしてもゲストとしても大小様々なイベントやパーティーに参加し、職種、役職、人種、年齢などが異なる様々な人々と接する機会に恵まれた。



ここでは、ホテルマンとして様々なお客様を迎えてきた経験が活かされた。

僕は海外へ向かう人々に対するアドバイスを求められることがある。

僕は『日本についての知識』が鍵だと考える。

パーティーの立ち話等の実体験を踏まえて気が付いた事は、ある話題に対して相手は『僕が如何にオーストラリア事情に精通しているか』ではなく、『日本ではどうなのか』ということに興味があるということ。

話題は千差万別色だが、胸を張って『日本ではこうです』と言える方が相手の印象は良くなる。オーストラリアでは役職が上がるほど高い教養が求められる。

そんな相手の懐に入る（或いは『ナメられない』）ためには、それなりの素養が必要だ。

また、『自国に無関心な輩』は信用されないし、自国を好きな理由も嫌いな理由も言えないようでは相手にされない、と僕は感じた。

日頃から母国に関心を払うこともまた、海外で活躍する機会に繋がるのだと確信する。謙虚は日本人の美德だが、自虐や無知は失笑のもとだ。

身近なアドバイスとしては、日本的な特技があれば尚宜しい。  
実例として、『巻き寿司』や『手打ちうどん』は料理としてだけでなく、パフォーマンスとしてもウケがよかった。

グローバル人材には行動力、そして教養が求められる。  
今からでも、日本の芸術、武道、和食など豊かな文化に触れては如何だろうか？

かくいう僕は、帰国後に日本酒のソムリエである『利酒師』の認定を得た。是非とも埼玉県の素晴らしい食材を海外の人々に紹介する役割を担いたいと思う。